

ジ・ヨ・イスの詩 “Tilly”

福永和利

I

一九二七年ジ・ヨ・イス (James Joyce) は、世界の文学界を驚かした巨大な作品『ユーリシーズ』 (*Ulysses*, 1922) を出版した後、さながら巨鯨を追う飛魚の如く、崩黄色の表紙の、二四折り版 (11.9cm×9.3cm) の極めて小さい十一葉からなる詩集をペリのシ・イクスピア書房から出版した。名付けて『一篇一ページの詩集』 (*Pomes Penyeach*) といふ。題名の示すとおり、裏面に明かに PRICE ONE SHILLING と印刷されてある。これは十三篇の小詩から成り、一篇一ページで計一シリンド、最初の一編は「おまけ」という訳である。題名の *pome* という語は *pote* と同

じくジ・ヨ・イスの父がいつも揶揄してよく使った言葉からいの語形をとつて、ジ・ヨ・イスもまた常に *poem* や *poet* をこのように発音して、たゞこへりしである。また一つには *pomes* はフランス語の *pommes* (りんご) を暗示し、一篇ずつの詩をりんごに準らえたものであり、*pomes* は詩とりんごの二つの意味を持つてしゆものと考えじよ。正にこの頃、ジ・ヨ・イスは『フィネガンの通夜』 (*Finnegans Wake*) から謎の大作に成長する断片を『進行中の作品』 (*Work in Progress*) という仮題の下に発表しつゝあつた時じ、ジ・ヨ・イスにとってまいのみんなの言葉の遊戯はいたつて平凡な pun であつただらひ。

それで、詩集の最初を飾る “Tilly” という詩の題の意味

(福永)

であるが、これは *O. E. D.* に記載出されない語であるが、ダブリンの方言では「余分の分量」「おまけ」という意味で、いわゆる「ベノ屋の「ダース、十三個」(Baker's dozen) にあたる。ダブリンでは牛乳配達人が口や水差しに所定の量を入れるべく、小量の *tilly* を加へる。この語はやはり『トランカ』の読者には親しみのある語である。

She [an old milkmaid] poured again measureful
and a ^⑤tilly. リの詩集に載せられた十三篇は一九〇四年か
ら一九一四年の間に、ダブリン、トリニティ、チャーチ
ハムそれにペリで書かれたものや『室內樂』(Chamber
Music) に統べ第一の詩集である。『室內樂』の詩はいずれも韻律の整った、脚韻を備えた定型詩であるが、リの詩集は脚韻のない、行数も長短不同の自由詩である。前者は時には皮肉辛辣を含むこともあるが、多くは音楽と恋愛を題材として甘美纖細な情調のものであるに反して、後者はリズムが流暢でなく、不協和音が入って来ており、自ら追放人として海外流離の時に作られたものにみゆわしく、ムームも哀愁で、暗いものが多う。“Tilly” の作成は弟スタリロースによれば、すでに一九〇三年に測るようである。ジョイスは一九〇七年に『室内樂』を出版するため三七篇の詩を考えていたが、“Tilly”(當時は「キャブ」)

“Cabra” ルーラ題が(じゅうだ)はその詩形とともに盛られたマークが全体の詩と調和しないために、リの詩は削除され、一〇〇年後の出版まで、その機会を待つて『一篇一メリの詩集』の巻頭を「おまけ」として飾るに至つたのであつた。リの詩のテキストは次のとおりである。

TILLY

He travels after a winter sun,
Urging the cattle along a cold red road,

Calling to them, a voice they know,
He drives his beasts above Cabra.

The voice tells them home is warm,
They moo and make brute music with their

hoofs.

He drives them with a flowering branch before
him,

Smoke pluming with their foreheads.

Boor, bond of the herd,

Tonight stretch full by the fire!

I bleed by the black stream
For my torn bough!

かれは冬の太陽を追つて旅をする、

冷たい赤い道に沿つて家畜を励ましり、
かれらのよく知つてゐる声は、かれらを呼びひ。

かれはキャブラのかみてに家畜を駆つて行く。

その声は家は暖かいぞと告げる、

かれらはモー、モーとなき、蹄で野獸の調べを奏でる。
かれは花咲く枝をかざし駆りたてる、
煙は獸の額を飾りつゝ。

田夫野人よ、家畜の絆よ、

こよいは炉端で、手足を延ばせよ！
ぼくは黒い流れのほとりで出血する、
裂きとられたぼくの枝のために！

この詩は一見、些細な簡単明瞭な詩に見えるけれども、解き難い謎に満ちてゐる。この詩の大意は、ある男が花咲く枝を

かぎして、キャ布拉近くへ牛を追つて行く。牛たちに声をかけ励まし、牛もまた牧夫の言葉を理解して答える。もう一人の男なる「ぼく」は黒い流れのほとりで、裂きとられた自分の枝のため出血して悩むというのである。第一節第二節に表現された牛追う情景は、それだけで牧歌調の田園風景として理解できる。しかし、第三節にいたつて、「ぼく」なるもう一人の人物が現われて、自分の枝を裂きとられ、出血して懊惱する。このことは前の二節とどう関係するのか。そもそも、この田夫野人なる牧夫は何者であるのか。自分の枝とは何か、それを裂きとられて出血するのは何を意味するのか。ダンテの地獄において、枝を折りとられた樹木が出血するイメージは、多くの人びとに親しみのあるものだが、これとどう関係づけられるのか。この詩にはこうした難問が多い。これを解く研究に入るに先き立て、巧妙に構成されたこの詩の韻律について、そして現在の決定稿 “Tilly” が完成するまでに存在していた二つの未定稿、その推敲のあなどについて述べてみたい。

II

この詩は自由詩型であるが、よく調べて見ると巧妙精緻な語の配置や、頭韻(alliteration)、母音押韻(assonance)、

子音押韻 (consonance) など複雑な使用によって、自由詩の奔放を抑える抑制が強く働くとして、定期詩のもう敵しい格調をすら有してゐる。作詩家 (versifier) としてのジョン・エリスの面目を充分うかがい知るに足りる。詩は大体において「弱強格」 (iamb, ×_) を主調として、なかに「強弱格」 (trochee, _×) と「弱弱強格」 (anapest, ×_×) を交えた詩形をとり、第三節になって短い行にかけて突然詩人の視点が客觀から主觀へと移り、劇的のクライマックスを末尾の「強強格」 (spondee, _ _) で結んでゐる。特に詩全体を通じて、各節が主要な頭韻によつて組織されしる。第一節においては第一行の [k] 音が主要音として cattle, cold, calling, Cabra と交響する。cattle, Cabra は頭韻をなす。次に顕著な音は [r] 音で、red road では語頭で、travels, urging, during, Cabra では中間で交響し、after the winter は語の最後で、完全な内部押韻 (internal rhyme) を構成する。cold, road, know は [ou] の母音押韻をなし、calling は [ɔ:] やそれに近い効果をあげてゐる。

第二節では日が重要な子音で、moo, make, music における場合は語頭に、smoke と pluming では中間で them, home, warm, them, him やは語尾にある。次に顕著な子

音はや、flowering, forehead は語頭で、before, hoofs では中間にあり、moo, brute, hoofs, pluming は [u:] 音で母音押韻をなし、home [həʊm] と warm [wɔ:m] は母音押韻に近い効果を持つ。

第三節では頭韻のある単節音語は全部アクセントを持ち、b が主要音で、boor, bond, bleed, black, bough と交響し、e は full, fire, for で共鳴する。繰り返えされる音が何か本質的な意味を持つと断言できないが、第一節の cold が繰り返えされて響く。c 音のため、cold の「冷たさ」の観念を強く浮き彫りさせ、かゝ第一節において warmth の m 音が数回も交響して、特に cold と warm の対照によつて warmth 「暖かさ」の感じが強化される。

第三節では r 音の破裂音が暴力とか不和の觀念をすぐれま喚起するとはいえないが、第一節の beasts によって提起された b 音が brute, branch と漸次強化されて、第三節において強勢のある单音節語の主調音となつて爆発する。r のもとに頭韻、母音・子音押韻の使用極めて巧妙であつて、輝しい全一に統合されてゐる。

めどに三回の変化をうけた。R・シールズ(Robert Scholes)は次の如く“Tilly”形成の過程を明かにした。

元來この詩は早い頃、すなわちジニアスの母が死んだ一九〇三年にすでに制作されていた。これは前に述べた如く、弟スター・ローズの『ダブリン日記』の中で、一九〇三年の記事に “Tilly” の第一行—He travels after the wintry sun “が引用われてゐる。これが “Tilly” の題名を持つていなかつたこととも明かである。その後、前掲の第一行をもつて始まる “Cabra” と題した詩をタイプした原稿がコーネル大学に所蔵されるとのことであり、ついで一九一六年頃まで “Cabra” の原形のままジニアスはその詩の写しを取つていた。このことから推定して、その当時には現在の形の詩ができるであつてなかつたことは断言できるであら。一九一九年になつて「反芻動物」(“Ruminants”)と題名は変えられ、語句は1個所だけ訂正された原稿がバッファロー大学に所蔵されてしまふことである。その頃もなお最初の未定稿のまゝであり、第三節において徹底的な推敲により全然別の作品と考えられるほど改作が施されたのは、それから後のことであることは一九二七年『一篇1st』の詩集の出版の

少し前からでなかつたかハシールズは臆測していふ。“Tilly” の作成過程についてH·H·アンダーソンがそれを考察しているが、彼は一九〇四年の原稿の詩を “Ruminants” と呼ぶ。“Tilly” への改作が行われたのは一九〇四年から一九〇六年の間に相違ないと断定している。この断定はシールズの推定と異つてゐるが、シールズの資料を正しく見ての研究に従つておく。シールズのこの “Cabra” の原稿は次のとおりである。

Cabra

He travels after the wintry sun,
Driving the cattle along the straight red road;
Calling to them in a voice they know,
He drives the cattle above Cabra.

He

He tells them home is not far.
They low and make soft music with their hoofs.
He drives them without labour before him,
Steam pluming thier foreheads.

Herdsman, careful of the herd,

Tonight sleep well by the fire

When the herd too is asleep

And the door made fast.

第三節は前節の牧歌的風景を背景にして、終日の労苦を果たした牧夫に対して、家畜も眠り戸は締っている故、疲れた体を炉端に横たえよ、と勞わりの言葉を与える、牧夫と家畜とが一体化した平和な境地を表わしている。

かくて “Cabra” の未定稿と “Tilly” の決定稿を比較して見ると、前者から後者にいかに推敲されたか、韻律の上から、またイメージの上からいかなる意義が附加されたか、アンダーラインに従って説明する。

第一節 wintry → winter 古語あるいは詩語の響を持つ wintry を避け、winter ハフタリハフタリ after ハ内部押韻を構成す。¹⁹

Driving → Urging の推敲の第一の理由は第四行の drive との重複を避けるためであるが、牛を追う立ての意味の drive とは力と支配の意味が内在しているが、urge は牛を励ますのや、理性とか感情に訴えた両者に通う理解を含んでいることを暗示している。

straight → cold りねは cattle, cold, calling, Cabra に

より生産的音の音韻のために改作したものであり、同時に cold... road の母音押韻を生じ、なお中間の red は前後の語と d 音の子音押韻を響かせる。その上に straight では生じ得ない効果、すなわち次の節の warmth と対照して cold—warmth の強い両極のイメージを生み出している。

第三行で a voice の前の in が消されてゐるが、ソリに意味深い効果が生れて来る。in a voice they know ではれば、この句は calling の副詞的修飾句であるが、in を取るとより、これが he と同格をなし、call の主語の位置を止め、voice が主体性をとり、両者の関係は緊密になる。ジョイスのよく用いる語法である。

第四行 the cattle → his beasts の変化にみる、the cattle (× ↘ ×) のリズムが his beasts (× ↘) にみる完全な iamb となり、この行が始めて完全な「弱強四歩格」(iambic tetrametre) となる。²⁰ 第二行 cattle の繰り返しが避けて、beasts, brute, branch, before, boor, bond, bleed, black, bough の頭韻の連続をつくる最初の語を打ち出す。

the → his これは牛追う「かれ」が単なる雇い人ではない、所有者として家畜を結びつくる絆であることを表わ

す。また beasts の方が cattle もの家畜と牛飼いの野獣性を強調する。第一節において soft の代りに brute を、careful にて三節において Herdsman の代りに boor を、careful にて bond を用いたことと相俟つて野性が強められる。

第五行これ He → the voice は先に述べたよのに he と a voice they know へよりよへ一致する。not far → warm これは日押韻を強め、anapest のリズム (××-) を避けねじると共に、最も大切なことは第一節で cold の使用によって生じた cold—warmth の対照のイメージを作り出すに必要な推敲であった。

第六行 low → moo これは日頭韻のためと古語めいた語感を伴う low の代用である。

第七行 without labour → with a flowering branch と第八行の Steam → smoke については第三節の総括的改作に関連していくので、全体の解釈の際に、これを述べることとする。

この解釈に従えば、父ジョンを牛飼いに、十人に近い弟妹たちを牛たちに準らえたものである。この当時ジョイスの母は死亡し、父の浪費飲酒のため一家は貧窮に陥って、十回以上もダブリンを中心として、住居を移し、この頃は市の西北部の郊外キャブラに住んでいたのである。今日ではキャブラは中産階級の住宅地となっているが、元来この地名は愛蘭語で不毛の地とか毒氣のもつた地とかを意味したということである。弟スタンリースは生涯父に反抗したが、ジョイスは生涯父に愛着を感じていたようである。ジョイスの分身と見られる『肖像』の主人公ステイーヴンは統いて『ヨリシーズ』の中にも現われて来るのであるが、その中で窮乏に沈んだ悲惨な妹の姿を描いている。父に引き連れられた家族一同の姿を暖かい眼差しで眺めたのが、この詩の表現するところのものであつたかも知れない。しかし、この解釈は「キャブラ」あるいは「反芻動物

である。『室内樂』の精密な校訂をして、この詩集の物語的構成と象徴的手法について研究した書の序文の中で次のように述べている。「一九〇四年にダブリンで書かれ、もともと「反芻動物」と呼ばれたこの詩 “Tilly” はダブリンの郊外キャブラにおける彼の父、弟、そのほか他の家族の者たちとの関係を取り扱っている。」

この解釈に従えば、父ジョンを牛飼いに、十人に近い弟妹たちを牛たちに準らえたものである。この当時ジョイスの母は死亡し、父の浪費飲酒のため一家は貧窮に陥って、十回以上もダブリンを中心として、住居を移し、この頃は市の西北部の郊外キャ布拉に住んでいたのである。今日ではキャ布拉は中産階級の住宅地となっているが、元来この地名は愛蘭語で不毛の地とか毒氣のもつた地とかを意味したということである。弟スタンリースは生涯父に反抗したが、ジョイスは生涯父に愛着を感じていたようである。ジョイスの分身と見られる『肖像』の主人公ステイーヴンは統いて『ヨリシーズ』の中にも現われて来るのであるが、その中で窮乏に沈んだ悲惨な妹の姿を描いている。父に引き連れられた家族一同の姿を暖かい眼差しで眺めたのが、この詩の表現するところのものであつたかも知れない。しかし、この解釈は「キャ布拉」あるいは「反芻動物

四

それで、次に決定稿 “Tilly” の難解な第三節の解釈に研究を進めるのであるが、私の見たところではこの詩の内容に言及した最も早いものはティンダル (W. Y. Tindall)

物」の詩に関する限り適切である。決定稿に枝を裂き取ら
れて出血し苦悶する作者が出現するのは、皮相な解釈かも
知れぬが、一家窮乏離散の弟妹たちの長男たる「ぼく」の
何ら為すべき術もない苦悶と解すべきであろうか。實際ま
だ母の存命中であったが、ダブリンの北の郊外（キャヴラ
かもしない）に住んでいた頃、貧困の中で食事をしてい
る弟妹たちに対して自責の念を感じる場所がある。

次に今日最も徹底した浩瀚な伝記 *James Joyce* の著
者、R・ヒルマン (Richard Ellmann) の解釈がある。そ
の書の中で “Tilly” オジニアの母の死を背景において
解釈すべしを提示し、その間の事情を次の如く明かに
している。

すなわち、ジョイスの母メイ・ジョイスは一九〇三年四
十四歳の若さで死んだ。臨終にあたって、彼女は昏睡に陥
り、家族一同は枕頭に坐し祈りを捧げていた。ジョイスも
弟も跪坐してないのを見て、伯父が叱責厳命するが、二人
は従わなかった。妻に先き立たれたジョン・ジョイスは
慰ぐさむべき術もなく泣きに泣いた。父の偽善的号泣に憤
激したスタニロースは父のあらゆる非行を責めて、公然と
父を難詰した時、父は静かに聞いて、ただ「お前には人生
が分からんのだよ」というのみだった。数日経つて、彼

は父が母へ宛てた恋文の一束を発見した。弟の質問に「つ
まんないものだ」とジョイスは答えた。息子としての私情
より文芸批評家精神が優位に立ったのだ。こうした変身が
素早くできない弟は、これを読みもしないで焼却してしま
った。ジョイスは感情を外に洩られない男だったが、彼は
『ヨリシーズ』の中や、若き日の思い出の、品じなを後生
大事に秘蔵している母の苦しそうな甘い気持を次の如き表現
で伝えていた。

Silent with awe and pity I [Stephen] went to
her bedside. She [his mother] was crying in her
wretched bed. For those words, Stephen: love's
bitter mystery.

where now?

Her secrets: old feather fans, tasselled dancecards,
powdered with musk, a gaud of amber beads in her
locked drawer.

ヒルマンはいふ述べた後、“Tilly”の中、ジョイスは自
分の感情を要約しているのだと結論してゐる。しかし、彼
の感情は何であるか、ヒルマンははつきり言明していない
故、曖昧であるので、臆測の解釈を加えて見たい。

第三節で、家畜を引き連れて帰つて来る田夫野人よ、

よいは炉端で眠れと呼びかけるのは自問自答であつて、裂き取られた枝（亡き妻）のため私は血を流すと答えたもの

で、「ばく」はすなわち「彼」、父ジョーンであり、亡き妻に対する心の苛責——表面上は無情な行動をとったにも拘らず妻に対して秘かに抱いていた憐憫の情、一束の恋文と安ものの記念品を唯一の生き甲斐として胸に秘めて逝った妻に対する断腸の思いのため出血するのだと解釈である。これは第三節が自問自答との解釈であるが、不自然と思われる。あくまで、「彼」は父ジョーンであり、「ばく」は詩人ジョイスであると考えると、裂き取られた枝は亡き母の象徴であるとなるが、何故に「ばく」は魂に苦悶を覚えるのであるか。かく考えて来れば、母の臨終において跪いて最後の祈りを拒否したジョイスが骨髄まで痛みを覚えた“agenbite of inwit”（良心の苛責）のための出血と解釈で済むと思われる。この“agenbite of inwit”は「ヨリシーズ」全篇のモチーフとしてスティーヴンの心を去來し、彼の魂を懊惱させるものである。

かく解釈すると、第二節のflowering branchは当然詩人から裂き取られた花咲ぐ枝、すなわち母の面影であつて、これを前方に振りかざしつゝ、子供から成る家畜の群れを先導して行くのである。

五

このような解釈は、亡き母が裂き取られた枝のイメージで表わされたことに対しても、樹木から出血するイメージの文学的伝統に関しても、納得のいく理解を与え得ない。

『肖像』の主人公スティーヴンは父母から、学校から神の司祭となることを囁き望されたが、彼はその期待に背いて、かえつて美の司祭、芸術の使徒になろうと志さす。『肖像』のテーマはスティーヴンの魂の成長発展を跡づけたもので、この小説は一種の教養小説と称せられるものである。

主人公の志むす運命からの誘惑者、この妨害者として友人クランリ（Cranly）が現われる。⁽¹⁵⁾ クランリは『肖像』の未定稿 Ur-Portrait ともいうべき作品 Stephen Hero の中にも出て来る人物である。元来このモデルとなつた人物は、J·F·バーン（J. F. Byrne）という、若き日ダブリンの大学に学んだ頃の学友であった。このクランリなる学友を“Tilly”的牧夫と同一人物と見なして、この詩に貫した解釈を与えているのが、C·G·アンダーソンである。以下『スティーヴン・ヒアロー』や『肖像』を援用して立論して行く過程と結論に耳を傾けよう。『一篇一ペニの詩集』十三篇の詩の中で、ダブリンを背景にしたもの

は、前述の如く^④れただ一篇であつた。一九〇四年といふ年は『ヨリシーズ』に取り扱われている年で、『ヨリンーズ』愛読者や研究者の間で主人公 Leopold Bloom の名に因んで Bloom's year と呼ばれ、ブルームの行動が細かく描かれた、たゞ一回すなわち六月十六日は Bloom's day と呼ばれて いるのであるが、この年こそジョイスは新妻ノラ(Nora Barnacle)を伴つて、永久に故国愛蘭を棄てて大陸へ亡命した年であった。かのクランリこそ『ステイヴン・ヒアロー』や『肖像』の主人公ステイヴンの競争相手であり、裏切者である。當時美の司祭となろうと志すステイヴンはトマス・アクィナス(Thomas Aquinas)の隠微な語彙の中からステイヴン独特の美的理論を構成しつつあった。『ステイヴン・ヒアロー』の第二十五、二六章においてステイヴンは最も真剣厳肅な氣分に侵つて説明する。美的真髓は integrity (全)、symmetry (調和)、radiance (光輝) であり、芸術家によつて観照された対象がいかにして、その epiphany (啓示) を獲得するかを説き明かし、弟子ともいふ友人クランクへの反応を待つが、全く期待に反する。

He felt Cranly's hostility and accused himself of having cheapening the eternal images of beauty.^⑤

と呼ばれて いるのであるが、この年こそジョイスは新妻

ノラ(Nora Barnacle)を伴つて、永久に故国愛蘭を棄てて大陸へ亡命した年であった。かのクランリこそ『ステイヴン・ヒアロー』や『肖像』の主人公ステイヴンの競争相手であり、裏切者である。當時美の司祭となろうと志すステイヴンはトマス・アクィナス(Thomas Aquinas)の隠微な語彙の中からステイヴン独特の美的理論を構成しつつあった。『ステイヴン・ヒアロー』の第二十五、二六章においてステイヴンは最も真剣厳肅な氣分に侵つて説明する。美的真髓は integrity (全)、symmetry (調和)、radiance (光輝) であり、芸術家によつて観照された対象がいかにして、その epiphany (啓示) を獲得するかを説き明かし、弟子ともいふ友人クランクへの反応を待つが、全く期待に反する。

『肖像』の最後のあたりで、ステイヴンは家庭、國家、教会のいざれであれ、自己を束縛する紺から脱しようとする心境にあつた。他方『ステイヴン・ヒアロー』の中で、同じ頃クランリはウイックロー(ダブリンの南の州)の田舎で豚商を開く計画を打ち明けるところがある。a bond of the herd (家畜を結ぶ紺であるとともに家畜の奴隸)^⑥にならうとの決心なのである。これはそのまま、

“Tilly” における「彼」と「ばく」の対比である。ウイ

ックロー行の汽車の時間を確かめるため駅へ行つた時、二人は一枚のニュースのビラを見て読む。

人生において何を為すべきかを決定しようとしていた二人の青年にとって、このビラは暗示的であった。人生とは何か、何故に自己は存在するのか、精神的価値と物質的価値とは、いずれが重大であるかをスティーヴンは考えていた。世俗的解答としては精神的価値は劣る。かのビラには国民大会、下水道計画、某氏の演説、著名弁護士の死亡、キャブラの狂った牝牛、文学などの順序に並んでいたのだ。クランリにとって家畜を結びつけ、またそれに結ばられる生活が最高の世俗的価値を有し、スティーヴンは文学などの精神的仕事の優位を主張する。

次に “Tilly” の牧夫がクランリであることの傍証として、クランリには常に家畜特に牛のイメージが伴っていることを挙げていく。あのニュースのビラにもキャブラの牝牛が現われたように、ジョイスはクランリを牛に結びつけて連想するからである。最初に挙げられるものは、『肖像』の中でスティーヴンがイエイツ (W. B. Yeats) の *The Countess Cathleen* に対して投げられた揶揄と嘲笑の叫び声を静かに考へている、かの有名な図書館の場面で、クランリは『牡牛の病氣』(Diseases of the Ox) という書

物の題目のページを夢中になつて見ている。なお、この書物のことは『ヨリシーズ』(III～IV四頁) に用いられている。『ヨリシーズ』の中で、クランリの名が現われる場面は *Word Index to Ulysses* によれば五回ある。その場面を詳しく述べる紙面がないので省略するが、それぞれ牛との関係のある文脈を持つか、牛の屠殺、裏切の行為のイメージが附き纏っている。このことからして、かの牧夫はクランリであり、“Tilly” の第三節の後半は彼の裏切による出血の苦悶と理解する重要な手がかりを得る。この外に、アンダーソンはこの詩の中に見られる他のイメージに、ティンダルの研究を借用して、読者の興味を惹きつけている。ティンダルは『室内樂』に用いられたイメージの象徴的用法を解説して、「道」(road, way) が単数で行先を持つている時は、希望を表わし、複数で行先を持つていない時は挫折を表わすと述べ、『肖像』の事例を多く指摘している。“肖像” の最後の一章は、作者の情緒の上から “Tilly” の場面と照応しており、スティーヴンは道のイメージを彼の裏切者から逃亡する手段と見ている。“Tilly” の場合、道は单数で行先は確定しているが、牧夫がその道の上におり、スティーヴンの行くべき道でない。スティーヴンにとって裏切者は、自分の魂の奥を洩らそうとした

時、決定的な拒絶を与えた友人クランリと恋人エマだけに限定されず、スティーヴンの健全なる成長を阻害した家庭国家教会の広い対象にまで拡大していった。彼らすべては『肖像』の最後の記載となつて現われ、脱出の手段として道のイメージが用いられる。

April 10. Faintly, under the heavy night, through the silence of the city which has turned from dreams to dreamless sleep as a weary lover whom no caresses move, the sound of hoofs under the road.

ペティーヴンが故国愛蘭で失つた友情と愛情を見出すべきところば、経験を通して真実へ通ずる孤独の道であった。“Tilly”においては、「冷たい赤い道」は獸に心を寄せる牧夫といれに答える獸に与えられた道に過ぎなかつた。

最初の原稿によれば、第二節第四行の *smoke* は *steam* とあつた。吐き出される息が冷たい外気にあたつて湯気となつて、牛の頭上を飾つてゐるという意味の、明瞭な写実的な情景であつた。*smoke* と取り換えることによつて、かかる意味の変化が生じたのである。*smoke* なる語は、『肖像』の中や、*smoke of incense* と用いられ、香煙、犠牲に捧げる香煙の意の場合が多いのや、“Tilly”において

の詩が *plume* と相俟つて儀式的あるいは祭祀的の含蓄のあることは明かである。獸の頭の前に香煙をけむらせり、祭壇へ、屠殺場へと赴く途上にあると解釈できる。冬の太陽を追つて西へ行く、すなわち「西へ行く」(*go west*)とは死ぬことを意味するもので、これらの牛たちはこの場合一夜の憩い臥所へでなく、永遠の死への道を急ぐのであって、大きい皮肉と解せられる。最初の “Carra” の詩ではこの微妙複雑なイメージは生れて来ない。によって見ると、牛の頭を飾る煙と花咲く枝について、一つには屠殺場へ行く牛たちの最後を飾る花と香煙を、また一つには常にクランリの身辺に漂う悪臭とを詩人は感じたのであらう。

六

以上の如く、牧夫をジョイスの父、あるいは学友 J·F·バーンと見做し、作者の伝記的背景に照明をあてて、“Tilly”を解釈する説を述べたのであるが、後者は他の作品から意味やイメージを探求した、極めて読みの深いものである。次に第三節における「裂かれた枝」と「出血する」イメージに特に焦点をあてて、世界文学の伝統の流れの中に追放と裏切を読みとろうとしたのは R·シ

『マルズ』である。裂き取られた樹木の枝は、古来多くの偉大な詩人たちによつて使用された詩的心象であり、世界文学の偉大な文学的遺産である。

ユーライアの詩人ヴァージル（Virgil）は『イエニーアス』（Aeneid）の中で、のイメージを用いて云ふ。『ロイ滅亡』（Troilus and Cressida）の大将イニーアス（Aeneas）は追放者として流浪する身となり、トラキアの海岸に上陸して、都市建設の目的をもつて、母なるヴィーナスの祭壇を飾るため、ギンバ（Myrtle）の枝を引き裂くと黒い血が傷けられた木から流れ出で、呻き声が聞えるのに、イニーアスは悽然とする。

I drew near; and essaying to tear up the green growth from the soil, that I might deck the altar with leafy boughs, I see an awful portent, wondrous to tell. For from the first tree, which is torn from the ground with broken roots, drops of black blood trickle and stain the earth with gore.

ルの樹ばくハイドロイド（Priam）の王子ボリューム（Polydorus）が樹に化した、その成れの果であつた。トロヤ戦争にあたつて、密かに父王は王子に財宝を持たせ、トロキアの地に難を避けさせた。しかるに、トラキア

王は財宝に眼がくらみ、王子を裏切つて殺害し、王子は樹と化していただつた。

次は、オヴィディウス（Ovid）の『転生』（Metamorphoses）である。オヴィディウスが『肖像』の巻頭の標語としてその一行を引用しているほど、彼に親しみのある古典であるが、それでは神社の庭に生えた数百年を経た巨大な樺の木が冒瀆の男の手によって打ち倒される。犠牲に捧げられ、頭を刎ねられた壯牛の首から出るよしは、木から血が迸り出た。この男は氷に閉ざされた飢餓の不毛の地へ追放の復讐を受けるのである。

出血する樹木のイメージが最も強く描かれているのは、ダンテの『神曲』地獄篇第十三歌である。ダンテはヴァージルの先導によつて沸き立つ血の河のほとりを通つて自殺者の森に入つて来る。ヴァージルに命ぜられるままに、ダンテは茨の木から一枝を引き抜くと出血し、黒い血とともに発せられた聲を聞いて、驚愕する。ヴァージルはかかる驚異な出来事を『イエニーアス』の中でも語つたことをダンテに思い出せば、その木をしてその身の上を語らしめる。

So I put forth my hand a little way,

And broke a branchlet from a thorn-tree tall;

And the trunk cried out: "Why tear my limbs
away?"

Then it grew dark with blood, and therewithal
Cried out again: "Why dost thou rend my bones?
Breathes there no pity in thy breast at all?

We that are turned to trees were human once;
Nay, thou shouldst tender a more pious hand
Though we had been the souls of scorpions."

この木は現世においては、シシリ王に仕えた顧問、学者、詩人であったピール・デルラ・ヴァーリアであったが、王フレデリックに反逆罪の廉で告発投獄され、盲目にされ、追放の末、自殺に追いやられたのであった。

E・スペンサー (Edmund Spenser) の『神仙女王』(*The Faerie Queene*) 第一巻第二歌第二八節—四五節において、赤十字の騎士は魔女のために花輪を作らうと美事な樹木から枝を裂きとると、樹木は出血し、自分は魔女によって誘惑され裏切られ、今は固く樹木の内側に閉ざされている男であることを語るのである。

以上じつのかの古典における樹木の出血と歎き声は、オヴィッドを除きいじりとく裏切と追放の歎きであり、"Tilly" めぐれを背景に持つ物語の文学伝統の一変形と見られる。この詩においては、この作者が立っている情況の詳細は、古典詩人の物語詩に見るよう展開してはいない。読者は、その詩が暗示するところの素材を充分に知つて、詩人がこの詩を書いた背景を推量して詳細な物語を作り出さねばならない。かくて一見謎に見えた詩が引喩の持つ文脈の中において眺められる時、さながら山頂に達して豁然として開ける眺望の如く、複雑な意味を持った詩の世界が展開するのである。ジョイスにとっては裏切と追放のテーマは極めて重要な要素である。生来彼は多くの偏執病患者的不安、妄想を持つていた。犬、雷、十三の数字、特に裏切あるいは裏切に対する疑念が常に彼につきまとい、彼を悩ました。彼が青年時代持っていた多くの友人も裏切の容疑者となり、ついには常に忠実な保護者であった、かの弟スタニロースやむ『カリシーズ』や『フネガン』の通夜に好意を示さなかつたため、彼に背を向けるに至つたのである。裏切は最初から彼のテーマであった。

短篇集『ダブリナーズ』の中の『死せる人びと』("The Dead") は主人公 G・ランロイが妻グレタの若き日の恋

人、今は死せる少年M・ヒューリによって復讐をうける物語である。かくて、一方に出血する樹木のイメージの文学的伝統と、他方ジョイスの生涯と作品の中に流れる追放と裏切のテーマの重要性を熟知するものならば、ただちに花咲く枝を振りかざして家畜を驅り立てる牧夫を、偏狭な愛蘭文学復興のために活動する者たち、また彼の前途の道に立ち塞がるすべての者が詩の中に形象化したものとして認めるのである。それ故、この牧夫は、自己の魂の鍛錬場で自己の民族の良心を創造しようと試みるため追放された眞の詩人から花輪を篡奪して、これを振りかざして行くのである。また、この牧夫とともに「死せる人びと」の死者M・ヒューリ、『ユリシーズ』の篡奪者バック・マリガン、『肖像』のクランリ、戯曲『追放者』のR・ハンドなど一連の人物が読者の眼前に浮びあがるのである。追放と裏切のテーマに対するジョイスの関心は生涯附き纏うた妄執ともいすべきもので、彼の幼い頃の書きものと伝えられる『ヒューリ、お前もか』(Et tu, Healy)から『フィネガンの通夜』に至るまで、彼の脳裏を離ることはなかつたのである。

今まで “Tilly” の解釈を詳説して来た。その伝記的背景のうち唯一つの事実を強調して、牧夫は父ジョーンと見做す説、裏切った学友J・F・バーンと見る説を説明し、最後に古典の一節を凝縮した一句を引用することにより、文学的伝統の与える詩的雰囲気、情況と詩人の独自な生活体験とを対照し融合して、一つの詩の世界を創造しているという第三の説を解説して来たが、第二のアンダーソンの細微にわたつた分析と ambivalent なイメージの使用の説明など聞くべきところ多く、これらの分析を根底におき、文学的伝統の上に総合した伝記的背景を重ねて考慮する必要のある解釈を私は取りたいと思う。始めに詳説したように、この詩は元来いくつかの生成の段階を経ていてことを考慮するとき、最初の稿は最も素朴で「裂き取られた枝」と「出血」のイメージではなく、単純に父を牧夫に見たたて写実的田園詩と見られるが、最後の稿に至っては、その間約二十年の歳月を読みし詩に盛り込むべき内容についても、考え方についても当然変化は起つたと考えるべきである。牧夫を学友J・F・バーン一人に限定するには最後の二行はより普遍的な相を持っていることを感ずる。生涯に

わたゞの作者の1貫した生活体験を統合的に表現するには古典文学伝統のイメージを借用せざるを得なかつたのであつたので。ト・ソ・ヒーリーの『罪地』(The Waste Land) の場面と同様であつて。

註

- (1) Stanislaus Joyce, *My Brother's Keeper* (1958), p. 247.
- (2) *Ulysses*, (Modern Library Edition), p. 15.
- (3) G. H. Healey (ed.), *The Dublin Diary of Stanislaus Joyce* (1962), p. 14.
- (4) Herbert Gorman, *James Joyce* (1941), p. 174.
- (5) C. G. Anderson, James Joyce's "Tilly" in *PMLA*, LXXXIII, 3 (1957).
- (6) James Joyce, *Stephen Hero*, (Jonathan Cape, 4th imp., 1950), Chap. XVI, p. 25. "The poet is born, not made" (Poeta nascitur, non fit) 『詩人は生れる、詩は作られる』 "The poem is made, not born" (Poema fit, non nascitur) 『詩は作られる、詩人は生まれる』
- (7) Robert Scholes, "Irish Poet" in *James Joyce Quarterly*, Vol. 11, No. 4, 1965.
- (8) C. G. Anderson, *op. cit.*, p. 288.
- (9) C. G. Anderson, 『Ruminants』
- (10) W. Y. Tindall, *James Joyce: Chamber Music* (1954), p. 48.
- (11) Stanislaus Joyce, *op. cit.*, p. 140.
- (12) *Ulysses*, pp. 239—40.
- (13) *A Portrait of the Artist as a Young Man*, (Penguin Classics), p. 161.
- (14) Richard Ellmann, *James Joyce* (1957), pp. 141—2.
- (15) *Ulysses*, p. 11.
- (16) *Portrait*, chap. V.
- (17) J. F. Byrne, *The Silent Years* (1958).
- (18) *Stephen Hero*, pp. 190—1.
- (19) *Ibid.*, p. 192.
- (20) *Ibid.*, p. 197.
- (21) bond 『絆』 「縛る、束ねる、縛る」 『縛る』 a man in bondage, a bondsman (奴隸) の縛る縛る。
- (22) *Stephen Hero*, p. 198.
- (23) *Portrait*, pp. 226—7.
- (24) *Ulysses*, pp. 9, 33—4, 182—3, 185, 208.
- (25) W. Y. Tindall, *op. cit.*, p. 216.
- (26) *Portrait*, p. 251.
- (27) *Ibid.*, pp. 217—8.
- (28) *Ibid.*, p. 246.
- (29) R. Scholes, *op. cit.*, pp. 261—4.
- (30) Virgil, *Aeneid*, Book III (Loeb Classical Library), p. 351.
- (31) Ovid, *Metamorphoses*, Book VIII, 738—764, (Loeb Classical Library), pp. 45—8.
- (32) Dante, *The Divine Comedy*: I Hell, Canto XIII, 31—7 (Penguin Classics), p. 150.